

事例5：車椅子ベルト

対象者の状況

- ⇒ 72歳、男性 要介護度5、寝たきり度C2、認知症高齢者の日常生活自立度
- ⇒ 移動はリクライニング車椅子を使用し全介助を行っている。
- ⇒ 頸椎が弱く、入浴も特浴を行っている。

身体拘束の状況

車椅子を使用している時も、身体の横への傾きが時折見られ、ずり落ちを防止するために車椅子ベルトを使用していた。

対応方法の検討

身体拘束廃止の意識が高まり、身体拘束の必要性を見直していくなかで、この事例の方については、極端に車椅子からずり落ちたり、立ち上がって歩こうとするような危険がなかったため、車椅子ベルトをはずすことを考えた。

車椅子に座っている姿を観察していると、自ら動こうはせず、横に傾くのも、本人が「しんどい」と感じていたり、体調が悪い時のみであることがわかった。

対 応

車椅子ベルトをはずし、リクライニングに深めに座ってもらうことで様子を見た。姿勢の傾きが見られるのは、入浴後で疲労があったり、体調が悪いときであったので、そのような時には特に目が行き届きやすいところで重点的に見守りを行った。

また、横への傾きが見られる時には、本人のADLを見ながら、早めにベッドに横になってもらうことにした。

経 過

特にずり落ちたりすることもなく、車椅子ベルトの使用を止めることができた。ベルトを外してから1～2週間で、確実にベルトがなくても大丈夫だと安心できるようになった。

立ち上がりや転倒の危険もなく、座る姿勢を変えてみるだけで身体拘束をなくすことができた。職員が「車椅子からのずり落ち＝車椅子ベルトの使用」と考えてしまいがちであることに気付かされた。

この件で、本人のADLの状態による対応の見直しの大切さを痛感する契機となった。

【着眼点（ポイント）】

姿勢を変えるという比較的取り組みやすい方法によって身体拘束が廃止できた事例

スタッフ自らが、思いこみによって安易に拘束を行っていないかを問い直すよ
いきっかけとなっている。